

脱亜論（「時事新報」明治十八年三月十六日）

|| 岩波書店『福沢諭吉選集』より

世界交通の道、便にして、西洋文明の風、東に漸し、到る處、草木も此風に靡かざるはなし。蓋し西洋の人物、古今に大に異るに非ずと雖ども、其舉動の古に遲鈍にして今に活発なるは、唯交通の利器を利用して、勢に乗ずるが故のみ。

故に、方今東洋に困するものゝ為に謀るに、此文明東漸の勢に激して之を防ぎ了る可きの覚悟あれば則ち可なりと雖ども、苟も世界中の現状を視察して、事実に不可なるを知らん者は、世と推し移りて、共に文明の海に浮沈し、共に文明の波を揚げて、共に文明の苦樂を与にするの外ある可らざるなり。

文明は猶、麻疹の流行の如し。目下東京の麻疹は、西国長崎の地方より東漸して、春暖と共に次第に蔓延する者の如し。此時に当り、此流行病の害を悪て之を防がんとするも、果して其手段ある可きや。我輩断じて其術なきを証す。有害一偏の流行病にても、尚且其勢には激す可らず。況や利害相伴ふて、常に利益多き文明に於てをや。啻に之を防がざるのみならず、力めて其蔓延を助け、国民をして早く其氣風に浴せしむるは、智者の事なる可し。

西洋近時の文明が我日本に入りたるは、嘉永の開国を發端

として、国民漸く其探る可きを知り、漸次に活発の氣風を催ふしたれども、進歩の道に横はるに古風老大の政府なるものありて、之を如何ともす可らず。政府を保存せん歟、文明は決して入る可らず。如何となれば、近時の文明は日本の旧套と兩立す可らずして、旧套を脱すれば同時に政府も亦廢滅す可ければなり。然ば則ち文明を防て其侵入を止めん歟、日本國は独立す可らず。如何となれば、世界文明の喧嘩繁劇は、東洋孤島の独睡を許さざればなり。

是に於てか我日本の士人は、國を重しとし政府を輕しとするの大義に基き、又辛に帝室の神聖尊嚴に依頼して、断じて旧政府を倒して新政府を立て、國中朝野の別なく、一切万事西洋近時の文明を採り、独り日本の旧套を脱したるのみならず、亞細亞全洲の中に在て新に一機軸を出し、主義とする所は唯脱亜の二字に在るのみ。

我日本の国土は亞細亞の東辺に在りと雖ども、其國民の精神は、既に亜細亞の固陋を脱して、西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは、近隣に國あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二國の人民も、古來亜細亞流の政教風俗に養はるゝこと、我日本國民に異ならずと雖ども、其人種の由来を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも、遺傳教育の旨に同じからざる所のある歟、日支韓三国相對し、支と韓と相似るの状は、支韓の日に於けるよりも近くし

て、此二国の者共は、一身に就き、又一国に關して、改進の道を知らず、交通至便の世の中に、文明の事物を聞見せざるに非ざれども、耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、其古風旧慣に恋々するの情は、百千年の古に異ならず。此文明日新の活劇場に、教育の事を論ずれば儒教主義と云ひ、学校の教旨は仁義礼智と称し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、其実際に於ては真理原則の知見なきのみか、道德さへ地を払ふて殘刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し。

我輩を以て此二国を視れば、今の文明東漸の風潮に際し、<sup>とそ</sup>逆も其独立を維持するの道ある可らず。幸にして其国中に志士の出現して、先づ国事開進の手始めとして、大に其政府を改革すること我維新の如き大挙を企て、先づ政治を改めて共に人心を一新するが如き活動あらば格別なれども、若しも然らざるに於ては、今より数年を出でずして亡国とな<sup>なり</sup>り、其国士は世界文明諸国の分割に帰す可きこと、一点の疑あることなし。如何となれば、麻疹に等しき文明開化の流行に遭ひながら、支韓兩國は其伝染の天然に背き、無理に之を避けんとして一室内に閉居し、空氣の流通を絶て窒塞<sup>ちつさく</sup>するものなればなり。

輔車唇齒<sup>ほしよしし</sup>とは、隣国相助くるの喻<sup>たと</sup>なれども、今の支那朝鮮は、我日本国のために一毫の援助<sup>いちごう</sup>と為らざるのみならず、西

洋文明人の眼を以てすれば、三国の地利相接するが為に、時に或は之を同一視し、支韓を評するの価を以て、我日本に命ずるの意味なきに非ず。例へば、支那朝鮮の政府が古風の專制にして、法律の恃<sup>たの</sup>む可きものあらざれば、西洋の人は、日本も亦無法律の国かと疑ひ、支那朝鮮の士人が惑溺深くして、科学の何ものたるを知らざれば、西洋の学者は、日本も亦陰陽五行の国かと思ひ、支那人が卑屈にして恥を知らざれば、日本人の義侠も之のために掩<sup>おほ</sup>はれ、朝鮮国に人を刑するの慘酷なるあれば、日本人も亦共に無情なるかと推量せらるゝが如き、是等の事例<sup>かたう</sup>を計れば枚<sup>まい</sup>挙<sup>いよ</sup>に違<sup>ちが</sup>はず。之を喻へば、比隣<sup>ひりん</sup>軒<sup>けん</sup>を並べたる一村一町内の者共が、愚にして無法にして、然かも殘忍無情なるときは、稀に其町村内の一家人が正当の人事に注意するも、他の醜<sup>みにく</sup>に掩<sup>おほ</sup>はれて湮没<sup>いんぼつ</sup>するものに異ならず。其影響の事実に現はれて、間接に我外交上の故障を成すことは実に少々ならず、我日本国の一大不幸と云ふ可し。

左<sup>さ</sup>れば今日の謀<sup>はかりごと</sup>を為すに、我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興<sup>おこ</sup>すの猶予ある可らず、寧<sup>むじ</sup>ろ其伍<sup>ご</sup>を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会積に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ。悪友を親しむ者は、共に悪名を免かる可らず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。